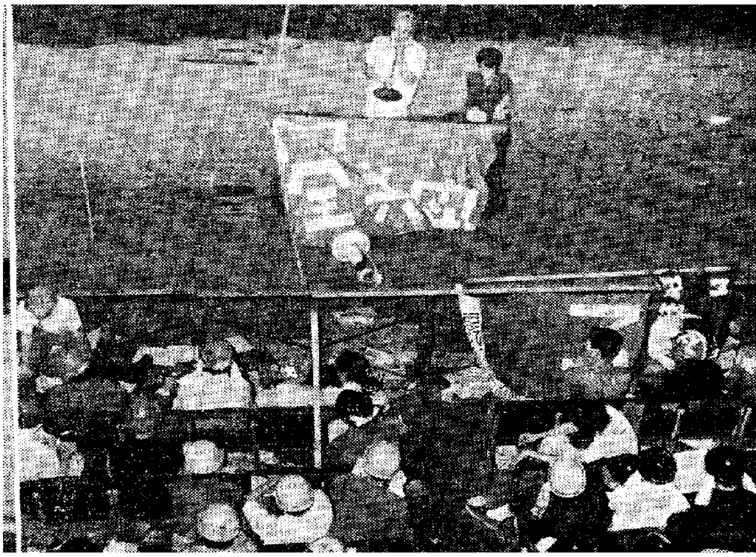
1969.6.26 明治大学新聞



27日 全都全共闘集る

本校

各党派の足並みの乱れ、分派闘争、ノンポリ学生の帰郷などで低調を続ける本校のストだが二十七日大学立法粉砕全都全共闘集会には約一〇〇〇人が参加、久し振りに盛り上りを見せた。

この日、午後一時半過ぎから開かれた全明総決起集会には、本校・和泉・生田各地区全共闘、べ平連などが集まり、会場の記念館一階はヘルメット学生でギッシリとうまった。

各学部闘争委員会からの挨拶、その他で集会は午後三時三十分すぎに閉会、直ちに全都全共闘大会の集会場である明治公園へ向け、お茶の水駅までのデモ行進を開始した。

生田・本校・和泉の順で約六〇〇人の隊列が駅前を埋めた。一行は国電で千駄谷駅へ向った。しかしそこには駅頭に立ちはだかる機動隊が待機し、「示威行進をやめよ」の号令一下、かぶっているヘルメットを強引にむしり取った。取らない学生をなぐりつけ、引き倒す。方々から悲鳴があがり、インターの歌声がまき起こる。「ヘルメットをかぶっているだけで何故示威行進になるのか、何故なぐられなければならないのか」。初参加の一学生がつぶやいた。

全都（及び近県）全共闘による大学立法粉砕集会はすでに始まっていた。約一万人の学生—黒・赤・白・緑・モヒカンのヘルメット。

本学全共闘を代表して福田直人君（経営四年）からの闘争経過報告がなされた。約一〇〇〇人にふくれあがった本学デモ隊から盛んな拍手が起った。

午後六時すぎ本学を先頭に国会・文部省に向けてのデモが開始された。

「リッポー・フンサイ」「トーソー・ショーリ」を叫びながらデモ隊は、時おり激しいジグザグデモを行ないながら進む。

機動隊・公安は、出発点付近、青山交差点、国会前付近など再三にわたってデモ指導者を逮捕。本学は社学同系だけで八名が検挙された。

鉄状網と機動隊に取り巻かれた「首相官邸」と「国会」—、いつからこの風景に慣れ親しみ、いつから疑問の余地なしに受け入れるようになったのか—。

デモ隊は日比谷公園での各大学別に総括集会を開いた後、解散した。本学本校地区の部隊は三々五々駿台に戻り、「本学前通り」をデモ行進、学館から紙吹雪が舞うなど"留守部隊"から盛んな歓迎をうけた。

二十八日には全都救援闘争に"ブンド""ML"約三〇〇人が進発するなど、街頭闘争については盛り上りを見せる本校地区の今頃である。なお、民青系・体育会学生も"大学立法反対""パリスト反対"をかかげてデモを行なっている。 ＝H＝

一号館は"闘争本部"

和泉

守衛所に陣取る白ヘル学生に身分証明書を見せて、中に入った。人があまりいないせいかキャンパスがやけに広く感じられる。

和泉地区の本丸は一号館。正面入口の細い"迷路"を入って行くと、ここでもまた「身分証明書を拝見」とくる。全共闘本部は教員室。ここには毎日数十人が泊り込んでいるという。一号館の部屋という部屋は、総てクラス、サークルの闘争本部と化しているが、中でも人目を引くのは某予備校の生徒で構成されている"浪人共闘会議"の部屋である。「最後の最後まで戦いますよ」——みんな本学生以上の激しい闘志をみせていた。

二号館、三号館にはまったくバリケードが築かれておらず、和泉研究室も正面入口は固く封鎖されていたが、内部は手がつけられていなかった。生協も需要の多少にかかわらず七月末迄、平常通りの運営を続けてゆく方針をだしている。

自主講座は他の地区に劣らず和泉地区でも盛ん。政経二年四組の自主講座をちょっとのぞいて見ると——火・水・木と週三日、それぞれ二課目の講座が組まれていた。火曜日の一時間目は「政治学批判」。二時間目が「文学論」。水曜日は「経済学批判」と「読書会」。木曜日は「現代アナキズム研究」と「自由討論」というカリキュラム。講師は院生や知人を頼んでいる。「なかなか充実していて、やりがいがありますよ」とは自主講座委員の話しであるが、予習、復習はもちろんのこと、正課以外の特設フランス語、さらにはレポート提出という"宿題"まであるというからかなりの厳しさ。しかし同クラス員の半数以上が出席するそうで、「まあ、成功でしょう」と同委員も満足顔であった。この現象は、まさしく既成の学問への反発と教授への不信感を如実に物語る証左以外の何ものでもないであろう。

しかし他の地区に比べると和泉地区に登校してくる学生は少ない大きく分けて、バリケード・ストを支持し積極的に闘争、あるいは自主講座などに出てくる学生とスポーツをやりに来る体育会系の学生にわけられる。この二者の中間に位置するいわゆる"ノンポリ"諸君は一体どうしているのであろうか——。そのほとんどは既に帰郷してしまったと聞く。また、東京にいたとしてもおそらくアルバイトに精を出しているのであろう「彼らにはまったく泣けてきますよ。大学立法はまさにわれわれ自身に直接むけられてきた弾圧だというのに——」とあるヘルメットの学生が話してくれた。 ＝K＝

毎日自主講座開く

生田

雨上りの二十六日、工学部の白い校舎に水滴が反射しまぶしかった。二、三号館と四号館にはさまれた通路には、十五、六人が二台の中古車のエンジンを熱心にのぞき込んでいた。「自動車技術研究部」と書いてある。全共闘和泉本部のラク書キではないが、"昨日と今日の間にどれほどのちがいを見つけることができよう"。しかしラク書キ氏はそういう意味で書きなぐったわけではないのかもしれないし、あるいはそういう言葉で表現された「自動車技術研究部」こそいい迷惑かもしれない。

生田駅側の階段を登り、途中自動車を過ぎて正門に行った。二十三日に工・農両闘委約一七〇人の手によって封鎖された正門には、逆さになったイスが背空にそそり立っていた。

工闘委のバリケードをくぐってまず迎えてくれたものは壁にかかったヘルメット。一ヵ所にかたまった赤・黒など約二〇個が"闘争中"を思わせる。二〇三番講師控室は「会議室」の貼り紙がしてあり、大きなテーブルが二つ。生協から取り寄せたランチがいくつも重ねてあり、食べる時は一〇〇円を出資する。黒板には、「八時起床—デモる 八時三十分—全体会議 十時三十分—自主講座・（後略）」と書いてある。自主講座のビラには、「六月二十四日—大学の改革・中村幸安 一三二四番教室」など七月二日まできちんと予定されている。そして、次のような詩が載っていた。

生きている 生きている
バリケードの腹の中で
生きている
自主講座という
栄養をとりながら
生きている

闘ってこの壁に「警備係の心得」とあって、本部内、一号館屋上、校内が重点配置場所である。ヘルメット、角材は勿論のこと、トランシーバーも使用する。建築闘委の"御寝所"をみたら、フトンに小ネコが一匹うずくまっていた。ボタンを押すとお茶が出てくる便利なシロモノに、"高館工業振興会"とあった。「学生には何にも役立っていない」と追求され、廃止を迫られている工振の"正体"が「ここにあった」といい、「これでようやく学生に還元された」とある学生が笑った。

農闘委本部は第一校舎三階にあった。会議中だったので、農経二の一のクラスに入った。「毎日朝十時に登校すること 全員週一回の泊り込みを原則として貫徹する」。テーブルの上には、目覚し時計と自主講座用らしいテキストが開いたままだった。 ＝Y＝